



湖月抄

子毒



紅梅

細 卷名以詞号之詞

のさうらうさお梅とあり白

乃卷の并乃一也或説竹川と一徳并とせり。そ故に豊

幼少の時よりコトの事コトありて也コトされども紅梅竹

川と流身コトとるコトこ此卷の豊の并とるんコトり。但横

乃并ともりコトなコトや 河此卷の別コトく梅系コト大納言

傳コトとるコトり。竹川と并の二とも定コトごコトり。昔中

將竹川あり始コト田後侍従中央コト宰相終コト中納言也此

考コトり。の始コトり源中納言とあり。此の竹川乃源コトごコトん

ゆり。又竹川の事コト。梅系大納言とあり。さうらう

又梅系大納言とあり。而詮コト此卷の竹川の中コトるコトん

一コト 三五回 三又回 而詮此卷をり年紀のコト乳明コト入コトべ

らむ。此卷の紅梅の大旨乃傳竹川と竹川の大旨乃



列傳之類れども其時代を引合せざるべからざるべ  
 け巻し行川の中央橋推本総角と同時なり  
 細 董女一七二歳の事く花巻三ヶ年の事わりおの  
 事と此巻との十七八ヶ年の事也

その以 三廿歳端と三下よ

つらり紅梅梅娘も智く  
 といふ心寄るふまなり 佛の而  
 説の経より本特とつらら  
 といふ三下よつららハ  
 佛の舎佛とらふは念で

梅家入知え 晴後号紅梅  
 右大信梅家入知えハ紅  
 大信のあのみこと 三四巻  
 といふ

西平よりつららとあり  
 同書上藤一と云ふ

後の事なりと作らる  
 如の事とつらら梅娘  
 のあはれ河海忠仁を  
 古今よさらの事なりと  
 いまつららとつらら  
 といふ後の事なりと  
 愚索 素麻抄より成那  
 自筆の事なりとつらら  
 といふ 西平よりつらら

三廿は紅梅

こは梅家入知えとつらら  
 の事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 の事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら

世よあつららありあり  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら

つららありありありあり  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら

多ていふ事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら

こよありありありあり  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら  
 といふの事なりとつらら







母君がくらくらく入る  
また夜の目もつれく  
りりとも

くらくらくや 田舎  
の足元の月を照らす  
づりともくらくや

くらくらくや 田舎  
の足元の月を照らす  
づりともくらくや

くらくらくや 田舎  
の足元の月を照らす  
づりともくらくや

の西方南の西方と一いよあかしく  
はひきりしはるくひきりしはるく  
うらめぬ 田舎 終末のひきりしはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく

くらくくはるくはるくはるくはるく  
とさくはるくはるくはるくはるく  
らひくはるくはるくはるくはるく  
肺のやうはるくはるくはるくはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく  
て母 田舎 終末のひきりしはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく  
終末のひきりしはるくはるくはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく

くらくくはるくはるくはるくはるく  
とさくはるくはるくはるくはるく  
らひくはるくはるくはるくはるく  
肺のやうはるくはるくはるくはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく  
て母 田舎 終末のひきりしはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく  
終末のひきりしはるくはるくはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく  
くらくくはるくはるくはるくはるく

らんぐせのやりかへし  
孟梅先生の内なる  
ゆらゆらとえたる  
無拍子  
孟梅の夜はるれ  
うらやうと

らんぐせのやりかへし  
孟梅先生の内なる  
ゆらゆらとえたる  
無拍子

かきくつしとぞいでし  
ゆらゆらとえたる  
孟梅先生の夜はるれ  
うらやうと  
ゆらゆらとえたる  
孟梅先生の夜はるれ  
うらやうと  
ゆらゆらとえたる  
孟梅先生の夜はるれ  
うらやうと

ゆらゆらとえたる  
孟梅先生の夜はるれ  
うらやうと  
ゆらゆらとえたる  
孟梅先生の夜はるれ  
うらやうと

ゆらゆらとえたる  
孟梅先生の夜はるれ  
うらやうと  
ゆらゆらとえたる  
孟梅先生の夜はるれ  
うらやうと

ゆらゆらとえたる  
孟梅先生の夜はるれ  
うらやうと  
ゆらゆらとえたる  
孟梅先生の夜はるれ  
うらやうと









あつて 細すの書とあつたの字西義あり物と先とく 三凡の心ありて白き  
る梅のれが書のとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
畧記のたのうと凡のうとつとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
つてさうとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
いふさうとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう

中義 細 白文申す  
己知り申すは書は  
まらり 肝明申す  
のうのとつとくは  
夫ア夫のわがゆと  
のおとあつたり

白文の書中よかり  
し人の若れいとい

細すの書とあつたの字西義あり物と先とく 三凡の心ありて白き  
る梅のれが書のとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
畧記のたのうと凡のうとつとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
つてさうとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
いふさうとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう

時とれ 細 婦義の  
あつたの書とあつたの字西義あり物と先とく 三凡の心ありて白き  
る梅のれが書のとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
畧記のたのうと凡のうとつとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
つてさうとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
いふさうとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう

あつたの書とあつたの字西義あり物と先とく 三凡の心ありて白き  
る梅のれが書のとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
畧記のたのうと凡のうとつとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
つてさうとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう  
いふさうとくはあつたの心と凡の心とつとくは中義のすとのめりてさう





しつもの けふのきく  
細 白えい天の白ひ  
もんしきういせの梅  
と白とすすべし  
れ中とせとすういせ  
し 師 六の清在方昇下  
のふろんは押をうく  
まふし花のしりめあう  
よわうと梅の花のひひ  
のそつりゆりあ樹梅  
花のきと 細 見もる野に  
つひりまうり 三 花のあ  
よりいせあうりうたれ  
と人のとらあやあ  
あしとひひをさう  
りそのまひのうら

あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり

あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり

あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり

あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり

若君の白ひと人いふ  
まのり 細 見もる野に  
く 指をありし  
方の指り指しと並あ君  
の白ひと白えい天の白ひ  
よまつりまうり  
西 推考  
ゆんせとすういせ  
三 白えい天の白ひと人いふ  
そよんせとすういせ  
うとんせとすういせ  
師 若君の白ひと人いふ  
ひひとすういせ  
まうり

かうらひいせん 若  
まうらひいせん 若  
ていせとすういせ  
かうらひいせん 若

あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり  
あしとひひをさうり

さうしたの 細梅八天加奇  
特うり句のうらとくは源中  
納言の白よりそあはぬ  
わく  
花よりそ入ても 三句  
よ中老とまのうせんのふ  
われはゆすあもえ白ま  
つらととひおのあしこ

うじふら 細梅  
あふみあふみあふみあふみ  
ようりてのぞと人

よくて細梅八天のいふ  
三人もアうらうらうら  
それとけ白まんわあが  
らよまのあはゆあま  
わんはうら

ととあうらとまよと  
わくばと 細梅  
あまのいふとけあま  
わがゆひまあまと白まの  
あひまそのあまとさう地  
らうゆとあまはうら  
とあまとさう地  
と白まのいふとけと  
アふま 一うら

ゆきりまよと 細梅のゆ  
方のゆきとまゆらま

あうらうらあまあまあまあま  
三葉のうらうらあまあまあまあまのあまあま  
あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま



有りて白文のすけ  
しめりて有り  
このありて我まじい  
し白のけありて我まじい  
紅梅のんごありて我ま  
あしうりてして我ま  
しこしめら有り

ハの文のひりて 細  
の中意のうごあり  
のまじく難れ有り  
なうりていひありてハ推  
辛きよありて有り

ありてやうありて  
えの根者白へのすけ  
実よありてして  
ふよと

れんそひてありて  
三番りてありて  
人へのありてありて  
らありてありてありて  
あやありてありてありて  
とありてありてありて  
ひありてありてありて  
しありてありてありて  
きありてありてありて  
しありてありてありて  
ふありてありてありて  
らありてありてありて  
がりありてありてありて

れんそひてありて  
三番りてありて  
人へのありてありて  
らありてありてありて  
あやありてありてありて  
とありてありてありて  
ひありてありてありて  
しありてありてありて  
きありてありてありて  
しありてありてありて  
ふありてありてありて  
らありてありてありて  
がりありてありてありて

あやありてありてありて  
とありてありてありて  
ひありてありてありて  
しありてありてありて  
きありてありてありて  
しありてありてありて  
ふありてありてありて  
らありてありてありて  
がりありてありてありて

とありてありてありて  
ひありてありてありて  
しありてありてありて  
きありてありてありて  
しありてありてありて  
ふありてありてありて  
らありてありてありて  
がりありてありてありて

しありてありてありて  
ふありてありてありて  
らありてありてありて  
がりありてありてありて

らありてありてありて  
がりありてありてありて

がりありてありてありて

